



昔語質屋
 庫卷之一
 初篇



特別
 A13
 4305
 1





山のふもと
 ありては
 なるまゝ
 ありては
 なるまゝ
 ありては

寶屋庫巻



歌書
 李も軍
 去年
 高し吉
 野山
 録支考
 勺
 静業

寶屋庫巻



昔語 質屋庫初編總目錄

發端 室咲の質草

第八 眉間尺觸腰盃

第一 讀書先生款業

第九 橋逸勢薄命一行物

第二 友切丸

第十 紀名虎錦繡梳鼻禪

第三 曾我十郎衛小紋衣袖

第十一 袈裟御前苦節徒

第四 諸葛孔明陣大鼓

第十二 九尾狐裘

第五 依藤太龍宮入の弓袋

第十三 崇徳院天狗取剪

第六 石堂九高野詣脚絆

第十四 鎌倉時代の上下

第七 平將門袞龍製東

第十五 米糞上人の乞食袋

通計一十六條 完

昔語 質屋庫卷之一

東都

曲亭馬琴演



發端 室咲の質草

行く相値莖く相望枝く相準。葉く相向華く相順。実く相當。此無量壽経よ所言。天宮の宝樹やて塵世ぬあ。所ふあふぞと。洪容齋が隨筆と引くや霞も雲井よまか。南都の皇居不遠。からぬ六田の御の質屋と。子理み和訓由典物と。預り世渡り野。五器堅い身上羨る。好事屋宝樹と。ふりのありけり。後醍醐帝の延元。より。後龜山院の天授まで。南帝三世。俺ハ二代より好交小就。道真質りて活業と。こ。ぬら。足らぬ世帯ハ夏冬。の。入。の。ミ。チ。取。る。質。草。の。小。茶。う。ら。枯。を。妻。か。る。南。朝。

元来難波の時の要ふ鼻と割談は漏びて大臣納言諱兼光
 門の公族も先祖傳來の什物と好ま屋を庫住ひて八月限の大
 樹波將又流まんとするにたふ利足の碇は怒るに夏は虫乾ゆ入ふ
 任し冬の火災も苦ふゆの松どつが物やてつが物あるぬ金が敵の世々
 さまやうせん世紙袴と十字字隈襖の中あつとりともその罪よあつとと
 つてその子よりつて備茂と譲る質札恨しとど凡夫の愛惜心かの
 質庫よ替るるにけかも兩夜長月の簷の玉木青寂く遠き寺この
 撞枕よかよと店の真高軒主管が断齒ハ浴室の漬の栓挽まこ
 おのづから関くかどく丁稚が寐徳ハ燈市の点教囉小口の又炊妻
 が森がりの米俵と投るがどく女ユカ外と枕ハ轆する綿桶小由似る
 べし九少壯の寐而不寤所以ハ血氣盛ん肌肉滑ひ氣道通くと管衛の

經緯
 精精
 不倦也
 又云
 謂不利
 貞也

行その常と失つと故に昼ハ精よて夜ハ覺せども寤ど又老人ハ血氣
 衰へその肌肉澤ハと管衛の道障をなふ昼と精よりびと夜と
 寐らまじと難經の四十六難は鏡とより宝樹ハ今茲五十二歳夜寐
 れぬハ本末の老人質丸といひながらゆりゆり病ハの不寐病人と
 たのまぬ金の術とくららくと睡まじと嚙つくやうの門の狗一馬場
 責る天井の氣は枕敷てつが宿るがら密と起ちと引捲る織細の手燭と
 袖のてら掩ひ納戸客房庖厨すて三遍廻まば怪ゆるる質庫のかきか
 のの言とて盗賊と胸くら澄び臥する主管小所
 為体と見定めんと流石ハ老功氣と結めて怪るるがら教ふは足と翻
 息と籠庫の戸只まよて網戸の目よりて覗けば二階より流る燭臺の

質屋庫卷一

臘燭早と早く白昏のどく人駭園望とくら相譚る物のいひまは
 盗賊のへ似たり。宝樹ははくとうらめて亦つくとあふす。南朝第一の
 博士ありたる北島准后親房卿の宣ひとこそあれ。白氣と昏時と丘陵の
 間あてその出入する亦と人の中へ必金のありと白澤圖ふ記し又黄金の
 光ハ赤し。夜ハ火光あり。又白氣ありと本草中にも見しとあり。このまを令
 の妖精もて。或も積とえけし。或ハ白氣と化り。或ハ青蛇とあり。或ハ黄
 とありと。畢類賦の載たり。豈金銭のまはらんや。韓幹が書き馬も
 鬼と乗せくよく走り。金園が画る馬ハ夜荻戸の芳宜と食も伊勢國の古
 廟の繪るハ疫鬼と乗てきり。香山嘉禾門橋の石刻。孩兒ハ夜歩く人と初
 づか相摸路るる石地。花ハ化て旅客小欲くきり。されバ大刀夜堂古書画
 の額年と積と。けと。その精鬱と崇あり。まら。されバ鬼の為り。

必奪ひ去らると。郎瑛ハ怖うとて。過去と引き未来と終と。宣ひ
 たり。傳へ受け。まよ正。貨物の妖怪ありやあらん。と
 びづくやと毛骨と。怖と怖と。見と。腰あり。綾と脱出と。
 細戸の扇と。密と。用た。塵枚。落の簞子より。彼首是首と。驚仰バ。
 五十目掛の臘燭と。大燭。臺四五本へ。げゆ。る。老る。弱れ
 あり。和風倍漢様。或ハ武者態のつめげめ。或ハ美婦人の白
 ちる。高様。の義衣被る。ハ。秦。入。と。呂不韋。と。又屋
 康秀。が。歌。藤。と。似。新。負。山。人。の。花。の。蔭。休。め。大。伴。黒。王。の。身。と
 誦む。と。と。朱。買。臣。が。続。書。不。似。古。往。今。来。の。可。本
 唐山の大坐人。と。と。人。の。寛。鬼。と。と。寛。鬼。の。み。な。れ
 年。の。庫。の。籠。る。諸。方。の。道。具。質。が。假。の。形。状。と。頭。と。あ。れ。く。

世と墓の。夏牙と語り慰むる。現中物の執事ハ有情小出心
 小入。古き女の小袖を買てその袖口より細中なる。ゆとやう半く
 招くと眼前よりとらふ世の怪談も証が。つらるる正と語りやへ
 字をわと踏かゝる。大和松木の管階子。驛を彼如へ去ればと。二段
 てハ吻吐息。二段踏てハ又踏踏。三段四段とやうやう。欄干の蔭より
 頭と擡て。さんまが上座小一筒の老翁鶴衣よす。襷。して読書先生
 と稱するあり。その何物ぞと孰視せば。和細工の唐木造り。舊の主こそ
 定うらね。裏小延喜の年号記せ。その容異形の教養る。煤
 随は黒く手擡と。幾許の書と読けん。その時代さやひやう。
 この席上より第一番の博士と入る。物體あり。

第一 読書先生の教案

そのと読書見臺先生席と信と見して乾びる。咳。往古学校
 の盛なり。世ふ。大博士あり。音博士あり。その後。文章。明法。陰陽。算
 算周易。漏刻。木の諸博士と云れ。その道と傳へ。その業と受へ。俊
 傑の学士のと云う。その比ハ某も昔江の名家と膝をたえ。日小生小
 尊敬せられ。が学校廢と。後ハ且く少納言入道信西の家小あり。かて保え
 の擾乱。人の益猛。三綱既ハ乱と。相濟へ。友や。村儒
 寄宿。と。年月と。さ。小。い。ぬ。元。の。南朝の博士。読書翁
 小伴と。吉野の皇居近くと。れ。殊更。鍾愛せ。月。六。森の講
 席と。缺。その家三世の重宝。り。當主ハ甚。強弱。の。手。習。学
 同。嫌。公。の。世。話。と。死。死。と。一。年。と。大。酒。と。飲。や。
 類。と。り。て。聚。る。友。と。ら。う。ん。遊。女。の。品。定。と。飲。と。買。と。小。遣。と。足。は。ハ。

家傳の房書と一部售て三方金あり。ある智恵を出し。経籍史傳
 歌書雜書。和漢の珍書いふら。小紙魚の肚を肥せのち折と披てさ
 さころか。何のりとも譯らぬ。唐宋名家の法帖。芝居の番附。さ
 とどの延喜天福の詠草。熟妓の艶簡。ると娛からむ。多くは紙骨同紙
 小賣りの損買りの得。缺本の仏書。清壺の蓋を張り。火を
 脱さ。古板の方書。炮爐。炙て黄る。小至る。壺。さ
 孟子の緘め。とさ。これ。戸の節孔を塞ぐ。終りて。濶。隙の一向を遺
 彼書を焼く。儒を坑。とと。笑。秦の始皇の悪政。易経。曆書
 残。小驕奢を省。衣食を。年。共。積貯。祖の房書。の
 淫酒の為。小。一部。遺。法。却。残。さ。思。ひ。と。つ。く。た。び。う
 道具屋の。小。遠。ら。ん。と。り。が。ま。正。家。の。像。見。と。負。劔。分。指。か

涙ととも。小。幸。して。り。留。め。腰。巻。も。ち。崩。ま。かり。土。蔭。の。棚。へ。あ。げ
 ら。ま。し。う。日。待。の。茶。番。年。忘。ま。の。素。人。淨。瑠。理。の。見。臺。は。調。宝。から
 る。朽。と。ま。宋。人。の。章。甫。と。り。楚。人。の。冠。と。さ。も。劣。る。果。ハ。質。屋
 の。庫。住。ひ。罪。多。て。縲。絏。の。恥。也。晴。主。は。侍。身。の。不。覚。各。位。の。心。の中。さ。ま。
 推。量。ら。ま。し。痛。と。苦。ら。ま。し。ひ。け。は。衆。皆。頻。々。嘆。息。し。現。い
 先生。の。宣。ふ。ま。宝。は。ま。ま。牙。の。さ。か。え。と。い。ハ。凡。夫。の。手。前。傍。子。先。祖。の
 千。幸。万。苦。して。組。ま。ま。家。庫。所。領。を。懐。して。取。る。子。孫。ハ。徳。も。つ。杖
 も。な。り。ま。ま。不。自。由。な。ぬ。洪。福。を。洪。福。と。い。ひ。由。り。け。は。淫。酒。の。為。小
 淫。が。死。室。と。忽。地。失。ハ。大。慈。ハ。所。謂。慈。は。ら。れ。ん。寔。ハ。人。の。こ。ろ。を。ら。
 お。を。病。し。れ。り。の。あ。じ。唐。山。ハ。戦。國。の。ま。え。り。と。さ。く。その。子。と。質。して。款。ハ
 遊。也。由。ま。る。大。日。本。の。上。古。ハ。人。の。こ。ろ。淳。朴。あ。り。人。質。お。り。の。る。は。

玉藻ノ前



曾我五郎

日紀ノ名虎

大後ノ虎

諸葛孔明

讀書先生



好事屋

宝樹ノ質庫ノ

二階小あいて

讀書先生

勸学ノ如

平ノ将門

橋ノやまの女兒

小保元平治の播乱より。親子の間でも兄弟でも。のろくりりて由縁
 せむ。壽永のたのめ木曾殿へその子志水冠者を枉ぐ。鎌倉之質屋へ。
 又元弘の三年ゆふ足利とのその三男。千寿王と質じて。相摸入道へ遍与
 せ。以来些旗色がらるゝると人質おのゝ遺録せぬ大將の精るゝし。
 今之栄枯得失へ人間の常ある。質屋といふ所の。金銭の融
 通絶て貪乏かかるとよきもあじ人質と道具質。品こそかつれ俺們
 へ主の先達よとらる忠臣世の史籍よ我らして。芳名を留むる
 不可也。いまでも質小おけ。衣類雜器ハ何ともあつて。百も餘計に備へ
 とく。切者小主管と口説の。受度と目の遠き。氣牙へ両損と
 としめら。瑕物よ。踏まこゝで推曲うま。厄限果てせよ。出ても質の流
 と賤めら。過世のうる悪報ぞ。烏の頭と白く。馬の頭へ角々

生ても。かくやで利足が度で。舊と返る日ハあじ。嗟夫朽とや。とま
 りつども。小声あり。立て発憤。且。続書先生も湧らり。その述懐ハ
 理あり。各位の責む。宝ハ。のさ。習といふ。善悪。ある。清負小
 ち。世よ。零。親の。為主の。乃。合。の。後。か。の。取。て。有。さ
 物と沽却。ゆむ。は。死。什物ハ。且。く。質入。さ。とも。恨む。さ。よ。あ。ら。ん
 淫酒の。為。牙の。皮。剥。白。徒。よ。品。ら。り。て。か。る。忠。孝。信。義。の。人。ハ。年。中。質
 屋へ奉。ふ。て。文。人。ハ。方。策。と。售。ら。む。武。士。ハ。腰。刀。と。質。小。置。む。これ。その
 本と。ま。ま。バ。る。り。その。本。乱。と。未。あ。さ。ま。ハ。和。漢。の。宝。つ。其。ハ。あれ。と。
 仏法僧の。三。宝。あ。も。ま。ま。書。籍。の。そ。ら。り。の。ゆ。ゆ。の。疎。大。約。盜。賊。の
 目。か。る。りの。第一。ハ。金。銭。第二。ハ。衣。裳。第三。ハ。大。刀。第四。ハ。銅。鐵。第五。ハ
 雜。具。の。ゆ。昏。寐。の。由。断。と。ん。と。て。乾。し。る。洗。濯。縹。絆。と。い。づ。水。入。口

の開一紙入金と。勤とれば茶釜を外し。茶灌とさうらひ。各々鳥のあまこと。
 一帙五圓金の唐本が鼻の先へ扱へてあつても。方策のそ捉てまゝ。盗賊の
 いと稀るもの。うやそり。價と知りて盗むとも。珍書ハ書書の印あれば。
 こそとさふ便あり。信の道よ入るのそあらざ。信ハさうと。賊でもそぬ人の
 宝とさぐさのの経藉史書よとめしるふ。かゝる宝と宝とせざるハ宝とせぬ
 迷ひん。將武夫の宝とさるもの。弓馬六具の武器よとせざる。れは文才
 暗けし。ハ真の弓とつと。ハのそと。商賈の宝とさるもの。ハ四方雲顧乃
 君子のり。まれば算筆小疎け。一日中世ハこらとせざる。武士ハ武士の
 学問あり。商賈ハ商賈の学問あり。士農工商のけくか。家業よとつて
 よく身と修め。行ひを修むりのハ聖人の徒といふべ。故りつあこるれば。武夫
 の弓馬劍法農夫の時とさぐさ。よく耕一耘るも。山妻の香詞とさる。

積む機織るも。番匠の規矩準繩りて。柱とそとさるも。商賈乃
 算盤取て。の本残と減さるも。そをけし。聖人の教も。いこくじ。かれハ
 人間日用の所使と。悉く儒の教りれば。出づりて。戸ふようさるハの。入ると
 ちとく道よ。らざるハ。家来ハ主と教ひ。子ハ親と。嚴び妻ハ夫。子ハ朋
 友。友ハ信と。長者ハ坐とせり。少きもの。とバ。隣とあつて。嫁とさる
 婿ハの式三献年賀追善。いづら。飯碗ハ左。箸と右。採と追
 たる。聖人の教も。礼節の端とさるもの。から。君ハ聖人の遺徳
 と。亦。天地ハ萬物を化育とせども。萬物ハ天地の徳と。親ハ子の
 子と。養育とせども。その子ハ却。又母の恩徳と。普く徳と。布
 らる。その徳と。種と。と。と。名つけて。仁と。い。ふ。人。も。井。の
 底の蛙。大海の淵と。三尺四方の井戸側。又。推當て。大海

衆皆驚きこれとて古金襴の袋小袖小全覆輪の袴と袴洞金造
つめこ赤洞鮎子丸鞆の帯と締重汚の腹巻小南虫鍔濺の刀指
と懸て金無垢の辨又まほほ色の襦と意気揚々する形勢の同ねど
名とある勇士の骨相と糸綿並の友切丸五幕僉談の名他中と感ぜぬ
のののののけり。彼壯伎のあやと時で。贈まる月貫は緋をそ死
焼又と切つて白ひの下死息を吻せ世は朽と死ともあつた。これの往昔建
久四年時中五月の兩夜の待倉曾我五郎小伴とく。二藤祐経と譽さつ
る。時宗秘傳のサノ銘の大刀。あるふいつの経より。源氏の重宝汚緑と
呼ば又友切丸の名と肩せらる。故に一旦紛失して鬼王亦よ苦を被れと
いども。彼亦もる恨て友切丸とく索しゆ急小名の諸候より急まら出ど
今小至る。汚緑と呼ぶりのこそあるけと。あるもあなぬ由かきて友切

丸と稱する。王送恨の至り。言語同断とのとらうと説あることはいふ
つか名を純と道人。おゆめととひしよ今夜の團坐ハ初めは幸ひ
わづつか素生と彈より。耳よりまをす抑五十六代の聖主清和
天皇より四代左馬次源朝臣撰及多甲は在せり。世の人より田満仲
と稱する。あるふ満仲を中より。ある青あふより。有一年筑紫の假
治と召する。二ツの大刀と造し。あるよ件の假治ハ名譽のみのあり。
八幡宮へ七日社系し。おれ頗丹精と抽つ。凡六十日あり。最上の大刀
二口とぬり。おれ長サおのく二尺七寸。満仲やうて有罪のりのと切せ
これを試みる。あるよ。一ツの大刀ハ罪人の鬚をかて切つけし。ハ鬚切とこれを
名つけ。又一ツの大刀ハ膝をかき切つけし。ハ膝丸とぞ名つけ。かくて
満仲の嫡男頼光朝臣の時小至る。美田源次綱有一夕一條大宮へ使

ときく。彼鬚切を主と借りて帯へし久。不慮小の大刀をりつて
 鬼の腕と切ちとら。うりて鬚切を更め。鬼切とぞ呼ばる。このころ
 我老病床小藤丸の大刀をりつて。山蜘蛛を破りへとあり。うりて藤丸
 とも改名して。後藤切とぞ呼ばる。この二口の宝刀とぞ満仲とら
 六代の孫六條判官為義が家小使とらる。有又彼二の大刀
 吼とぞ呼ばる。鬼切が吠とらる声ハ獅子の鳴小似とらる。又鬼切を改て
 獅子の子とこまを名づけ。蜘蛛切が吠とらる音ハ蛇の注とらる。とて吠丸
 と改名と。この後小為義判官ハ彼吠丸と壻と出とて。熊野別當教
 真小とす。小から宝刀と教真が身小著とす。小あつとと。権現へ進
 志とらける。ふえ曆のたぬ。範頼義経鎌倉殿の代官とて。平家と
 西海又討の月。熊野別當湛増む。教真が為義より泊とらける。

吠丸の大刀とぞ出。義経へ贈りし。うへ。義経殊よとらる。て亦
 吠丸を更て。汚緑と名つけとら。これハ熊野の春の山の緑とてけ
 出され。汚緑の名と負せと。かて義経ハ舍兄頼朝と不和とらる。
 六四ありと。このとも。鎌倉へ入と。まじ。空く腰裁より追と。これ京師
 へのやと。願の音ありて。彼汚緑の大刀と。箱根権現へ奉納とらる。
 けと。建久四年五月廿八日。曾我五郎時宗又の仇。上孫祐経を殺ん
 ととらと。箱根山へゆりて。別當行実又外あ。から牙の暇と告とら。ハ
 行実由と。やその気色と猜して。彼汚緑の大刀とぞ。時宗
 とく。うへ。この大刀とぞ。おり。随ハ仇人と。殺ら。たり。ら。
 そのら汚緑と。鎌倉へ。置と。は。太平記の劔の巻とら。この劔の
 巻と。のり。の。舊ハ太平記の首巻と。あ。ね。と。古書と。り。か。の。説

小志ふみされへ箱根の別當行実が千より曾我五郎が獲る大刀を
 満仲のとれ。こゝめて膝丸と名つけぬ。ひとを光をことと改名
 一。為義のとれ亦吠丸と改ると経亦活緑と名つけぬ。のふしと
 友切丸あつた。友切丸のぬ大刀を友切丸と名つけぬ。素よりから
 出るねて。これが為子子と妻妻と賣苦む看管の腸を断る。こそ
 彼友切といふ大刀へ。つる物ぞといふ小前小演する。獅子の子の別号
 為義判官。誓るりける。熊野別當教真も吠丸とせ。へ一具持より
 なる大刀。ツ失く。尻のぬれやうよ受け。播磨國より。は改治と
 言上。獅子の子と奉りて。少も違はざ。造りせらる。最上の大刀を
 けま。悦のふと限る。目貫小鳥と解り。れば小鳥とぞ名つけらる。
 この小鳥の獅子の子より。二分より長よりなる。有。二ツの大刀と

抜て障子へ。上をけ。置。う。なる。ふ。人。由。さ。ら。ぬ。ふ。か。く。と。倒。る。音
 け。え。け。ま。バ。い。ふ。大刀。を。持。び。ぬ。損。や。ま。つ。ら。ん。と。く。や。う。あ。て。て。ぬ。く
 目貫の二つ。長くと。ひつる。小鳥。が。あ。る。や。う。な。り。ふ。け。と。不。思
 涙。の。さ。る。べ。き。や。や。あ。る。截。する。か。と。て。先。を。さ。ま。い。も。さ。も。は。し
 怪。て。鞆。と。る。ふ。目貫。折。て。の。り。け。り。抜。て。入。る。鞆。の中。二。分。を。う。り
 新。よ。切。ま。す。目貫。と。突。抜。て。さ。が。り。な。り。と。え。え。え。これ。ハ。定。獅子。の子
 が。切。る。よ。こ。こ。ろ。ゆ。て。獅子。の子。を。改。名。し。て。友。切。と。名。つ。け。ら。る。と。く
 後。又。為。義。の。大刀。を。嫡。子。義。親。に。譲。り。ま。ら。れ。ら。る。と。亦。是。愈。の。巻。小
 づ。り。か。れ。ば。友。切。丸。の。初。の。名。ハ。賢。切。と。い。ひ。つ。る。と。光。の。と。れ。鬼。切。と。改。名。し
 為。義。又。獅子。の子。と。改。め。更。又。友。切。と。名。つ。け。ら。る。り。保。元。平。治。物語
 東。鑑。亦。と。按。ぶ。る。小。友。切。丸。の。と。く。え。い。と。東。鑑。支。治。元。年。九。月。十九。日。の

左頁巻一

鶴とつるせきゆ境にたる小殊小逸物とすえしる鶴か不圖水中へ
 被さあげしる。金覆輪の大刀あり。白河院殊小秘書中へしる。
 鳥羽院へ傳へさせしるひも。鳥羽院又崇徳院へすあつしるひけれで。
 為系判官へ賜てりり。かれは為系入道降人となりて。嫡子の為系を
 憑きて身とせしるは。彼鶴丸をも。為朝へめぐりよれり。由緒
 ある大刀あり。後白河院の御護刀小刀也。さるる久し東鑑に初
 らん。吠丸時旭と記し。次の條あり。吠丸鶴丸と記せし。不審。為朝の
 とし。鶴丸と時旭と改名せし。又時旭は源氏の重宝賢丸の一名歟
 尋ねば。がのぞく実録ふらう。その本と推して。曾我五郎小伴に。三藏
 祐経と譽ゆし。其へ源家の重宝友切丸あり。又為系経の爲保と
 改名あり。といふ。吠丸あり。又時宗が。仇人祐経を譽ん科。小年未

試して剣又判し。銘の形刀あり。時宗へ古今ヲ刃の勇士あり。その夜
 比類の死働してけし。大刀も名のき記あり。されば。越る。と。その當時の
 小説。昔が。戎の爲保とあり。戎の友切丸とあり。某が功名と。
 空し。吠丸友切。小奪れし。されば。大刀の事と記せし。書名。小劍の巻あり。と
 唱つて。中葉より。大刀と劍と混雜して。ひとう。小おぢえし。へ。誤りり。
 和名。鈔。小劍。和名と。流。さ。ど。別。小。屋。樓。を。奉。て。文。選。の。流。豆。流。岐。と。注
 せん。今。按。ど。る。小。屋。樓。は。吳。王。夫。差。が。伍。子。胥。へ。賜。し。る。劍。の。名。る。れ。小。劍。と
 流。流。岐。と。和。名。せん。もの。から。ど。さ。て。和。訓。づ。る。と。い。は。れ。る。の。義。あり。
 両。刃。の。て。小。劍。と。も。豆。流。岐。と。も。い。は。れ。ど。又。和。名。鈔。あり。一。刃。と。し。て。大。刀。
 和。名。太。知。小。刀。加。太。那。と。注。し。た。ら。む。か。ら。む。も。一。刃。の。り。の。小。限。れ。り。
 和。名。太。知。と。い。は。れ。る。の。義。あり。か。ら。む。と。い。は。れ。る。の。略。小。刀。加。太。那。

と和名沙注一たは今服指と唱るりののかさる。さかかきよと
 唱るりののら。今のかさるの片半や。羅むりのふあふだ。こま
 ろの和名の物。すりのふれど。久くあそその誤を。あふやるるん。
 職原の人ふらぬ下。又今の人。小くまると唱るりのも。和名。質太奈。こ
 和名。鈔。刻鏤の具の部。小。刀子。錐。鑿。銛。とる。と。出。せ。り。この字を被て
 唱るのいとの後のとどけ。さく。劔の巻。小。記。と。と。ろ。の。台。点。ま。が。さ。ら。の
 妻。鬼の鬼神と熟く。造化の迹あり。又。寃鬼。と。い。ふ。と。た。へ。出。霊。の
 類。さ。く。い。づ。も。形。る。れ。り。の。こ。ま。う。小。綱。の。い。ろ。あ。く。形。る。れ。鬼。の。手
 と。切。ア。さ。う。ら。ん。さ。う。は。に。又。獅子。の。天。竺。の。猛。獸。あ。く。唐。山。あ。も
 る。れ。り。の。る。小。為。義。へ。つ。あ。く。獅子。の。呼。声。を。う。ま。う。て。大。刀。の。名
 あ。せ。ら。に。さ。ん。野。猪。を。わ。の。ま。も。又。略。す。の。ま。も。い。へ。真。の。獅子

あ。あ。さ。る。飲。ふ。よ。大。刀。小。名。つ。る。と。ま。く。の。目。貫。小。つ。る。と。あ。れ。バ。鬼。切
 の。目。貫。小。獅子。を。造。る。と。あ。つ。く。さ。獅子。の。子。と。改。名。ま。く。れ。み。や
 あ。ら。ん。ま。ら。ん。又。蛇。の。注。声。小。似。う。と。い。ふ。も。お。不。つ。つ。る。た。と。山。見。う。ど。の
 大。蛇。の。野。睡。と。ま。く。と。あ。つ。る。ん。ど。い。と。蛇。の。注。声。と。ま。く。と。い。ふ。り。の。
 蛇。と。ま。く。と。い。ふ。か。く。ま。く。た。蛇。の。注。声。と。為。義。の。い。ろ。あ。く。ま。く。ま。く。
 の。ひ。り。ん。この。判。官。の。耳。よ。能。あ。つ。る。の。み。葛。盧。ふ。や。の。久。公。治。長。も。あ。つ
 じ。と。物。ま。く。と。い。ふ。の。け。と。ま。も。か。く。あ。も。信。が。く。ま。り。よ。又。吠。丸。と
 名。つ。け。と。別。よ。必。以。あ。つ。く。さ。ま。の。虚。実。を。辨。じ。て。ア。そ。の。恨。を。バ。人。あ。る
 へ。れ。ど。る。毎。世。の。人。の。あ。つ。る。た。の。曾。我。兄。弟。の。恨。ぞ。は。安。元。二。年。十。月。
 彼。胞。兄。弟。が。又。あ。つ。け。河。津。三。郎。祐。泰。へ。伊。豆。の。奥。乃。持。場。の。三。圖。が
 由。矢。ふ。あ。つ。く。忽。地。命。を。墮。く。る。時。小。一。萬。僅。又。五。歳。後。は。若。林。十。師
 祐。成。と。名。を。き。る

伊東祐親

女見

遍

頼朝の子

子

幸八



伊東九郎祐清

頼朝

祐親の二子



伊東祐親入道

辰ひめ

弟箱王僅よ三歳時宗と名するる母夢のうらちをみるが見八九歳
 才七歳といふとたふり又祐泰を養へる上原祐経が所為るは
 志ありて忽地復讐の志ありたり。あるふ。治承三年の秋八月。前右
 兵衛佐頼高高倉の宮の令旨せりり。まふらう。まらう。伊豆の
 山木を討て石橋山小旗と揚。その軍利らうらう。一旦没落まふらう。まらう。
 廣常常胤ホカ系り助けふらうて。や。頼もる。関左ハズとらうら。従へ
 基と鎌倉よ関をのへ。そのふらうて。平家の恩顧よ濟らうらう。坂東
 武者ホ。まらう。旗をさる。縁を求め。鎌倉へ出仕とらう。まらう。祐成時
 宗が祖又伊東祐親入道ハ系小伏て勢ひは属らう。小松少將惟盛
 の陣所へ系り加らう。伊豆の鯉名の浦らう。海上と廻らう。と。後河の
 のへ。天野藤内遠景よ生拘らう。と。黄瀬河の御旗亭へ

十四卷の
 系圖よ
 河津二郎
 祐近よ
 作ら祐近
 の嫡男
 祐道津
 津部と
 称これ
 祐成時宗
 又祐道の
 才伊東
 六郎祐
 忠之傳り
 の辨ハ
 次の巻よ
 さらん

引こまけり小三浦二郎義澄ハ祐親が塔るれば。罪名落居の程を
 義澄よ預らう。まらう。小先年。祐親入道が。於朝卿とらう。まらう。んと
 あると。祐親の二男。伊東九郎祐清密よこれを告るふらうて。その
 難と脱まらう。その志と。食出されて。勸賞の。と。ア。ひ
 のふらう。祐清と。推辞て受。天ハ。故。と。囚徒とらう。ら
 小の子や。恩賞と。家。を。牙の暇と。ら。と。まら
 平家へ死加らう。為小。上洛。恩の。死。と。報。後
 討死。今よ。美。と。そのら。鎌倉殿ハ。祐親法師が
 罪と宥め。對面見と。め。祐親。と。忽地。目
 縁故。頼朝卿。流人。と。伊豆の伊東が。宿所
 比。祐親が。女見。小密通。と。男兒。と。産。入。祐。の。祐。

左頁 三十一

七一

と仰せし。かしてそと祐成時宗ハ祖又由伯又由平家の子人のりる小
 ようて。世の中由陝くありて曾我太郎祐信小養也浮浪人ふりあり
 るがら五郎ハ幼雅さうり。勇氣殊さうり。運けし母公ハ終禍を
 惹出さうりと陪と祝髪して亡又の菩提を吊へと教馴し箱根権現乃
 別當行実の弟子とて。かて登山うたさども時宗の復讐の心
 移りて。遂は箱根と下山せうり。母公よ責懲されて彼此と於此
 ありて。北条時政ハ五郎が勇敢鳥とんと。意中よ謀るう。あは
 たりて。手あづけて。化るるく款待し。さうから烏帽子親と稱せ。これ
 元服也。時政の一字とよと。曾我五郎時宗と名告らうり。時宗
 の宗の字よ。さうぐの號あり。時政より六世の執權相摸守時宗朝臣
 の乳名と。北條五郎と稱せり。曾我五郎時宗のむねハ致といふ字と書べし
 ことと時宗と書。北條五郎とさうらうり。ことよふ人ハあれど東瀛也。
 曾我五郎時宗とあれハ。誤とへいひ。が。壁ハ西行法師の俗名と佐藤兵
 衛義清といひ。うべ。かて則清とも憲清とも書らる。か如く。このころの
 記録ハ人の名告也。訓のうふ字といひ。さうぐも引つけて書例あまは。
 曾我五郎の名告也。或ハ時宗と書あひハ時政と書らる。あはれべし。か
 推量の説と加ると。北條時宗執權の世ハ。律て致の字ハ代さる。あ
 とおし。さう北条時政が。か。の。て。く。る。我入帝とさうり。さうて。竊ハ。致の
 後。さう。さう。ハ。真実よ。その。孝。を。感激せし。ふ。あ。た。底。意。ふ。ま。の
 胞兄弟と欺。さ。騙。し。て。鎌。倉。殿。と。さ。り。な。ん。為。く。その。あ。つ。ふ。と。う。ん。た。
 このと。記。平。家。既。亡。び。て。四。海。の。賞。罰。を。鎌。倉。の。決。め。ふ。あり。我。れ。り
 世と早く。あ。り。つ。ふ。は。我。れ。ハ。の。月。幼。雅。し。あ。ら。う。ハ。海。内。の。權。柄。ハ。の。つ。ら



祐經赤木
 造りの
 庭
 箱玉
 与
 手
 七
 五

箱



向
屋
産
卷
一

箱
根
権
別
堂
打
突

二
藤
祐
經

七
五

勇我兄弟を賺せしむ。禪師公曉とてそのはして實於公と譽せしむ。北条又子の奸計ややふ成勢して執持の統と後九代の執權時めたぬ。公曉由又我家々の醫者のひひ初小ふして。その願末と洋ふさむ。時が人として右大臣了そむ又の仇をたむ。うらまを譽めり。藤原の武持たうんめ。禪師の外はほる人とのいせと。公曉へ実言とひはす。又の仇もあす。叔父の大臣と害せしむ。その身も忽地北条が馬に殺されし。北条又子が奸智又長。曹操直義の上ふさす。當時人てば欺くともいふて天を欺く。後世論定りて人又その悪といひのきり。各位へ何とさひひる。吾家物語といふ冊子も。往昔の小説るといふたをさす。記すも少く。鬼王の童の名あり。曾我時宗の童名と相王と唱へ又箱根の行童。壽王 東鑑文治五年 二月十二日の衆童 あり。又俊寛僧都の童扈後有王龜王又為義の季

子に天王あり。源文経の乳名遼那玉ホ。毛筆小違あふ。こまらそを。鬼王も又童の名あり。とあす。東鑑建久四年五月廿八日の條。曾我五郎と大見小平次と預り。うらまのれど。近江小平太といふりの。又さ。新左門 國三。後人の誘他に就中時宗朝夷が草摺引く。この。絶ては。こま。建保元年。夏五月の和田合戦。朝夷三郎義秀が足利義氏の遣の草摺と引めて相人と。うけは。義氏々の勇力。教。が。と。ひて。馬に拍り。と奪ら。さ。草摺の井と断離して。朝夷が手。主の遣。脱と大ると。東鑑。その餘の軍記に記す。撮合。と。義氏と曾我立郎小僧。うらま。彼朝夷へ和田義盛が三男。と。木曾。義仲が妻。朝繪が産と。なる。元暦元年春正月。木曾義仲。近江。の粟津。討死。ひ。比朝繪へ和田義盛。生拘。る。義盛朝繪。

第一

初學編

卷一